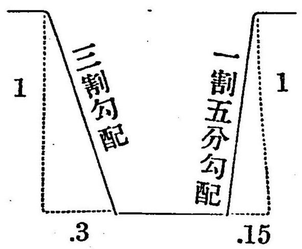
又土木家が堀割工事や盛土に於て稱へる所の勾配は何割何分といふのである。是は前と反對に垂線の長さを1と定め底邊が.3あれば三割勾配といひ、.15あれば一割五分勾配といふのである。



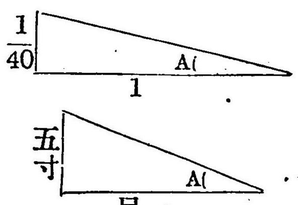
次に我國の大工が屋根抔の勾配を謂ふには、五寸勾配とか四寸勾配とかいふのは直角三角形の斜邊を一尺とし、一邊の垂線の長さが五寸あれば五寸勾配といふのである。普通瓦屋根の勾配は五寸勾配を常例とすといふことである。

今五寸勾配を角度にて表はせば

$$\sin A = \frac{5}{10} = \frac{1}{2},$$

即ち$\frac{1}{2}$の三角函數を有する正弦は三十度なるを以て求むる所の角は三十度である。

又前の四十分の一勾配は



$$\tan A = \frac{1}{40} = .025$$

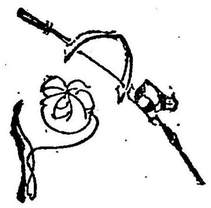
より表に就て凡二度許なるを知る、實に通常の坂路としては微々たるものである。

序に一割五分勾配の角度は

$$\cot A = \frac{.15}{1} = .15$$

是れ亦表より凡八十一度余なるを知る。

勾配はかく特殊の名稱あれども、測量術の方では一般に何度の仰角とか或は俯角と稱へるのである。



雜録

戰時に於ける青年の心得

法學士　服部路邊

「之れ要するに、陸海軍人が死を決して戰ひ、難苦缺乏を忍びて、國家に報ずるの精神を轉して以て、教育に從事するもの、及び教育を受くるものゝ精神と爲さんことは、本大臣の切に望むところなり。」

とは、去月、文部省令第二號を以つて、文部大臣久保田讓氏が發せられた訓示の末節である。

既に諸君も知らるゝ通り、日本は今や露國に對して戰を宣し、而して既に仁川、旅順に於て海戰は開かれ、我が帝國は大勝利を得たことである。由來我が國人は忠君愛國の熱情に富んで居る。それは此處に云ふまでも無いことであるが、此の熱情といふものは、兎角その極端に走り安いものである。云ひ換へれば、過度極端な情熱に走つた結果、やゝもすれば常識を失ひ易いものである。即ち理性なき情熱に驅られ易いものである。取り分け、我が會員諸君の年齢位な者は、この理性なしの情熱に驅られ易いものである。

文部大臣が此の訓令を出されたのも、蓋し之れを慮られてのことで、されば、その訓令のうちにも、次のように認められてある。

「國民が戰の進行に懸念し、平素の業務を顧るの遑なきに至るが如きは、忠愛の至情に出づるとするも、決して平素の沈着なる態度を變ずることなく、熱心誠意、益々其の職務に盡さんことを努めざるべからず。

思ふに今回の事變たる、其の關する所極めて大にして、其の結果は遠く我國家の將來に及ぶべし。是を以て教育者は能く學生生徒を訓誨して青年子女が國家に負ふところの責任は、將來益

々重を加ふるに至ることを知らしめ、多年此の重大なる責任を盡す修學時代に於いて、專心身の修養を務むるに在ることを躰認せしむべし。故に一勝一敗の報に接して常度を失するが如きことなく、又た他日戰捷の結果、平和を克復するに至るも、國家の前途は益々多事にして、今日の學生、生徒が成業の後、國家に盡すことの念容易ならざるを深く覺らしむべし。」

右に依つても、諸君は略ぼ此の文部大臣の訓諭の主意は何處に在るかい解ることであらう。それのみならず、今回の戰爭は固と永遠の平和の爲めであるからして、學生々徒が、その青年の客氣に驅られ、露國民に對して嘲罵を逞しくするが如きは、延いて他外國民まで、惡感情を懷かせるものであるから、此の邊は最も注意せねばならぬと認められてある。

されば、過日、仁川のに引きつゞいて旅順海戰大勝利の吉報が我が國へ達した時、早くも某々の學校の如きは、早計にも戰捷祝賀の提灯行列などをした。また夫れに引きつゞいて他の某學校なぞて、勝捷祝賀會を開かうとしたのを、文部大臣が差しとめたのも全く、右の旨意に基いてるのである。

日露兩國の間の國交が斷絶したと云ふ報が傳はると間もなく、仁川に、旅順に、連戰連勝、正義の鋒先の向ふところとして、何處に於いても勝たざるは無いといふことは、誠に此の上も無い快事である。それは實に快事であるのに相違ない。が考へて見給へ。あれは眞の序開きである。その國情が如何に憐れになつて居るとは云へ、兎にも角にも露國は、その人々に於て、國の面積に於て、世界に於ける地位に於て、日本よりも遙かに大なる帝國である。いかに世間から、彼は狡猾であると目されて居るにしても、露西亞は自ら誇る如く或る意味に於ては、たしかに賢明なる帝國であるのである。此の狡猾にして賢明なる世界の一强國

たる露國に、仁義天道を主とする極東の一帝國たる我が國が刃向ふのである。されば、僅か二三回の勝利で、輕々しく戰爭の前途を卜し、强者に敵なしなぞと、安んじて居ることの出來ぬのは勿論であらう。いかに其の國の人種が區々であり、從つて一般に行き渡れる愛國心に乏しいとは云へ、兎にも角にも、彼は命知らずの荒武者である。これから戰爭がだん〳〵進行して行くうちには、何のようなことがあるかも知れぬのである。されば僅かの一勝利に、最早心を許して、學生たるものが、その平素の沈着なる態度を失するか如きは、大に戒むべきことであらうと思はれる。

ましてや、文部大臣の訓諭にもある通り、他日戰捷の結果、平和を克復することが出來たにしても、それからは、國家の前途がます〳〵多端になつて來るのである。されば、今日の青年たるものは、預じめ其の覺悟をして居らねばならぬ。多端なる國家に對して聊か獻貢するところあるのには如何にせねばならぬかの覺悟が、今日から既に必要である。

覺悟！覺悟とは何ぞや。讀んで字の如しである。さなり、覺悟とは覺悟なり。されども、如何ようなる覺悟をして好いかと云へば、學生時代に在る諸君は、唯だ飽くまで學生の本分を守り、一意に其の志すところを學べば好いのである。教科書は餘所にして、新聞の號外なぞに血眼になる必要は無いのである。それは、同じく日本國民だものー我が國が勝てば勝つたで嬉しいに相違はない。相違はないが、嬉しと云つて、此の勉强ざかりの青年諸君が、教科書を餘所に號外ばかり見て居つたところで、果して國家の爲めに何になることぞ。諸君は先づ此處に思ひ及ばねばならぬのである。他日、國家の大達者たるべき諸君、何と左樣ではあるまいか。

これは第一に、目下學生たる青年諸君が、戰時に於て意に留めて置かねばならぬことである。

それから次ぎには、敵國たる露西亞人に對する諸君の心得である。これは云ふまでも無いことであるが、兎角、彼の「坊主が憎くけれや袈裟まで憎い」の俚言の通り、既に其の國に對して戰を開いて居れば、何處となく其の國の人は皆な憎いような氣のするものである。が、これは大國民たるべき襟度では無い。既に大國民である以上は、また諸君は他日大國民となるべき人である以上は、飽くまでも雅量が無くてはならぬ。

取り分け、既に開戰の後までも我が國に留つて居る露國人があるならば、それは能く〳〵餘儀ないことで留つて居ると見ねばならぬ。されば、彼等は實に惑れむべきでは無いか。實に氣の毒の至りでは無いか。四面楚歌の聲滿ち〳〵たる敵國の裡に、心細くも只だ一人取り殘されて居ることは何と氣の毒千萬では無いか。憎むべくよりも、寧ろ憐れむべきでは無いか。加ふるに、今回日露兩國が開戰することになつた理由は何かと云ふに

「天佑を保有し、萬世一系の皇祚を踐める、大日本國　皇帝は、忠實勇武なる汝有衆に示す。

朕茲に露國に對して戰を宣す。朕が陸海軍は宜く全力を極めて露國と交戰の事に從ふべし、朕が百僚有司は、宜く各々其の職務に率ひ、其の權能に應じて國家の目的を達するに努力すべし。凡そ國際條規の範圍に於て、一切の手段を盡し、遺算なからむことを期せよ。

惟ふに文明を平和に求め、列國と友誼を篤くして、以て東洋の治安を永遠に維持し、各國の權利、利益を損傷せずして、永く帝國の安全を將來に保障すべき事態を確立するは、朕夙に以て國交の要義と爲し、旦暮敢えて違はざらむことを期す。朕が有司も亦た能く　朕が意を體して事に從ひ、列國との關係年を逐ふて益々親厚に赴くを見る。今不幸にして露國と釁端を開くに至る。豈　朕が志ならむや。

帝國の重を韓國の保全に置くや一日の故に非ず

是れ兩國累世の關係に因るのみならず、韓國の存亡は實に帝國安危の繫る所たればなり。然るに露國は其の清國との明約、及び列國に對する累次の宣言に拘らず、依然滿洲に占據し、益々その地歩を鞏固にして、終に之を併呑せむとす、若し滿洲にして露國の領有に歸せむか、韓國の保全は支持するに由なく、極東の平和亦た素より望むべからず。故に　朕は此の機に際し、切に妥協に由て、時局を解決し、以て平和を恒久に維持せむことを期し、有司をして露國に提議し、半歳の久しきに亘りて屢次折衝を重ねしめたるも、露國は一も交讓の精神を以て之を迎へず。曠日彌久徒に時局の解決を遷延せしめ、陽に平和を唱道し、陰に海陸の軍備を增大し、以て我を屈從せしめむとす。凡そ露國が始より平和を好愛するの誠意なるもの、毫も認むるに由なし。露國は既に帝國の提議を容れず、韓國の安全は方に危急に瀕し、帝國の國利は將に侵迫

せられむとす。事既に茲に至る。帝國が平和の交渉に依り求めむとしたる將來の保障は、今日之を旗鼓の間に求むるの外なし。朕は有衆の忠實勇武なるに倚賴し、速に平和を永遠に克復し、以て帝國の光榮を保全せむことを期す。」

と、宣戰の詔勅にもある通り、「平和を永遠に克復」することが、此度の戰爭の目的であつて是れは、其の國の國民たるもの、いよ〳〵以つて聖意を體し、平和を希望する大國民の態度を以て事物に處して行かねばならぬでは無いか。されば青年諸君たるもの、ます〳〵此の邊に心を留め、淺間しい、輕々しい、擧動をしないように注意せねばならぬでは無いか。

それから最後に云ふべきことは、軍國の國に供する爲めの獻金のことである。諸君も知つての通り、近頃の新聞紙上には、この獻金に關する感心な談話が、一日に二つや三つ載つて居ないことは無いのである。取り分け、殊稱なる學生の獻金者

のごとなぞも載つて居る。これは誠に結構なことである。けれども、こゝに一つ注意して置かねばならぬことがある。

これも文部大臣の訓諭に認められて居るが、學生が自分で節約して得た資財の外、特更に父兄より要求するようなことがあつては、これは決して喜ぶべきことでは無い。既に前にも述べてある通り、世に學生たるものは、戰時であれ、何であれ自分の本分たる勉强をさへ怠らなければ、それで既に結構である。何にも餘計な考なぞをするには及ばぬのである。が、併し、父母から月に貰ふところの學費の中を、自分で節約して献金する如きも、決して惡しきことでは無い。否、左樣ありたいのである。けれども、之れが極端に走ると餘程困る。そこが考ふべき處である。何故なれば、學生は勉强さへして居れば、それが既に國家に對する無上の貢献であるから、それ以上のことをするのは、即に過分である。過分ではあるが、自ら時の軍國の秋なるを考へて、自身に困苦欠乏を忍び其の小遣の万分一をば、心ばかりに献納することだけで、既に其の赤誠は分明である。それ以上はする必要が無いのである。これは、くれ〳〵も注意せねばならぬ。戰時に於ける青年の心得に於ては、未だ〳〵云ふべきこともあるが、今回は此の邊にして、こゝで筆を止めることにしね。

蟲籠

(九) 友ちやん

滋賀縣　あきた生

友ちやんの姉さん、高等女學校の三年生、保險付の式部にて、毎つも青眼鏡をかしく掛け給へり。

ある日の事、式部の姉さん詩集繙きて、聲細う讀み給ふを、大人しう聞さつゝ傍にありし友ちやん、心配そうな顏して、

『姉ちやん眼見へないの？』

眼鏡越しに姉さん、友ちやんを見てほゝ笑みつゝ『なぜ……？』

だつて姉さん、お隣りのお爺樣は、眼鏡かけな眼が見へないと仰つしやるだもの……』

式部の姉さん思はず顏あからめ給ひぬ。

私立大學紹介

日本女子大學

芙鳳生

▲女學▼

女學とは何ぞや——『女學』子の言

女學とは何ぞや。

正直に告白すれば余は不幸にして世の所謂女學隆盛の嘔歌者に非る也。寧ろ或る意味に於いて、『女學』子と共に『試みに問へ。今の女學と古の女學と何の變革かある。もし維新を以て明治政体の起源とせば、今の女學に何の維新ありし、今の女子教育は依然として古の女子教育なり。但だ少しく異る所は海老茶の袴を着けたる事、椅子テーブルに腰かくる事、又ヲムレツ、ビーフテーキの料理を學ぶ事、外國語を囀づる事等少々の改良に過ぎず。他に何の新しき事、何の革新かありしぞ。

夫れ明治維新の改革は四民同等の新思想を發揮したり、新日本の男子教育は開發及び興味の新主義を發揮したり。而して今の女子教育には何の新しき生命と、何の新しき種子とが今の女學界に附興せられたる乎。見よ、昔の女子教育は精神的教育なりき、更に實行主義の教育なりき、斯くして是れが生氣となり、之れが献身的の生命となり、之れが宗教的の刺激となりたる一種の信仰は、今却つて亡び如今之れに代るものなし。されば今の女學を古の女學に比較して毫も革新したるものを見ざるのみならず、寧ろ其の退歩したるを見る。安ぞ女學の隆盛と言ふべけんや。

嗚呼今の女子教育者。其の理想、其の主義、其の操守果して如何。公等は心中確乎たる成見ある乎、公等は女性に對し明白なる理想あるか。見よ其の多數は凡俗の好尚に追隨し、其の批評を恐れ、紛々たる要求に奔走して唯だ偏に世上の賞贊に應せんとす、公等は教育家に非ずや、教育者にして

世上凡俗の好みに應じ、其の要求に動かされ、啻命是れ聞いて其の注文に應ぜんとす、果して是れ新男新女を養成する教育者なるか』を疑ふ者、その今にして茲に女子大學を特にわが姉妹の會員諸子の爲めに紹介の勞を取るの微意に至りては聊か他に有りと存す。

抑も然らば――許させ給へ余は此の稿に於いて理窟と議論を避けて實際を語るべき事を誓へりき。請ふさらば簡短に女子大學の門戸を諸子の爲めに開くに止まらん也。

新日本女子大學とはかゝるものとのみ此の筆。さは新らしき眞の女學の勃興に俟つもの獨り我れのみかは。

▲位置▼

目白の台――雜司ヶ谷祠畔の夕

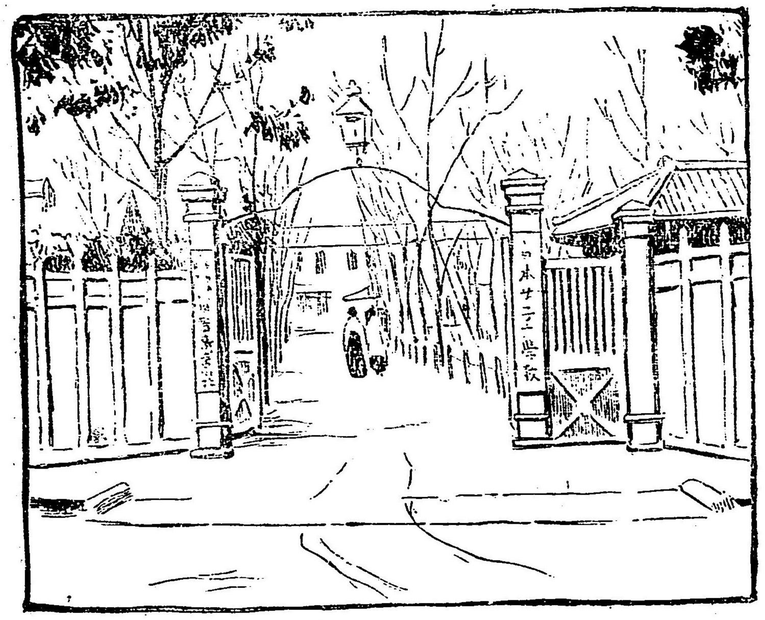
赤羽より乘換へてもよし、田端よりしても可なり。新橋線は品川より、新宿にて赤羽線に乘換てともに目白驛に下車すべし。千本松原姫小松小松をとはして道細く、風情多き田舍家の軒づたひ、高田豐川町の通りにそへば、目白臺の中央細川邸に隣り、樺山邸に對する所、欝蒼たる綠樫のその四方を繞ぐるもの、是れを日本女子大學校となす。地高く水清く、氣新に境閑なり。門を入れば幾十株の櫻樹生ひしげれるあなたにこなたに、やさしき唱歌の聲さへ響きて、菫色のカーテンや漏れしピヤノ、オルガンの調たえなる校庭にそへば、魏々たる灰白色の校舍は兩翼を張りて其の前に横はる。是れを附屬高等女學校の教室となす。大學部教室の敷地は其の前方にして、其右翼にあたる一部は工事已に〳〵落成せり。廊下を以て高等女學校に教室の東に列るものを理科教室とす。兩舍の間を北すれば二個の教師館に挾まれて、二層樓の寮舍の東西に連亘するを見るべし。寮舍と校舍との間にしつらはれたる一大花園は大隈伯の寄附にかゝり、圓形の花壇を中心として、幾多扇形の花壇是れを繞ぐり、其の間縱横に小逕を通じ

異花爛熳珍卉馥郁たり。加ふるに近郊多く勝地に富む。薄紫の煙たなびく關口高臺の雪の曙や、月しろさ目白の森の夜の靄に、人生問題の瞑想もよからずや。もしそれゆく秋の紅葉の森に、落葉たまぬく露をふんで、雜司ヶ谷祠畔靜かに暮れゆくゆうべの鐘にたゝずむの時、双のふり袖つゆおもゝ、われや果敢なく人やつれなく、若き想の胸の惱みにはゝ笑むの人わりや、なしや。

▲組織▼

沿革――主旨――狀

日本女子大學



『我が校は、過去に鑑み現在に照らし、又大いに將來に慮かり、女子を人間として、婦人として、國民としての三方面より教育するの主義方針を執り、本邦女子の心身發達の程度と、日進月歩の社會に適合せる一定の高等教育を授け、其の性格と實力とを高かめ、社會の進歩推移に順應して、女子たるものゝ本分を完ふするに足るの素養を與へん事を目的とするものなり。」

此の理想と宣言のもとに、わが日本女子大學校

は、朝野内外の貴紳によりて發起せられ、校長成瀬仁藏氏の熱心なる盡力によりて、はじめて小石川の新天地に華やかなる呱々の聲を擧げたる也。爾來校勢日に月に進み、隱然今や日東大帝國唯一の女子最高學府を以て目せらるゝに至りしもの、素より時勢の推移とはいへ、此の間にありて獻身的奔走の勞に當りし當局者の苦衷と熱心を諒とせざるを得ず。

かくの如くにして明治三十四年四月はじめて盛大なる開校式を擧げたる女子大學は、創業日猶浅きにも拘らず、昨年九月の調査によれば、已に生徒總數九百六十人を以て數ふるに至れり。

本校目下の組織はまづ大別して本科即ち大學部並びに豫科、附屬高等女學校となす。大學部はいまだ完全なる設備に達せず、現在既設されたるは家政部並びに文學部中の國文學部、英文學部の二部にして、未設計畫中にあるものを擧ぐれば理學部、教育部、体育部、音樂部、美術部、他に研究科を數ふ。附屬部にありては修業年限五ヶ年の高等女學校あるのみ。普通科の幼稚園、小學校、專門科の工藝部、商業部はいづれも未設也。

家政部は本校の創設にして、家政學に關するあらゆる科學を研究し、一家の主婦たる婦人に取りて必須の學を授くるものにして、英文學部は英語によりて美妙なる泰西の文學を研究し、傍ら品格の陶冶を圓滿ならしめん事を期し、國文學部は、古今の國文學の智識を與へ、以て社會の婦人として一般に文學の趣味を解せしめん事を期す。修學年限は共に三ヶ年にして、其の他英文學部に豫備科、家政國文學部に普通豫科（年限二ヶ年）並に英語別科あり、國文家政兩學部及高女の四年以上の生徒が正科の傍ら聽講するものにして生徒約五百餘名あり。高等女學校は他と大差なし。研究科は本年中開設せらるべく、是は本科の卒業生をして更に進んで深遠なる研究をなさしむる所なり。

目下生徒の總數は、豫科を通して英文學部に百

○五名、國文學部に百七十七名、家政學部に二百四十七名、他に普通豫科の七十二名、附屬高等女學校の三百五十七名を加へて實に九百五十八名の多數を數ふるに至れり。特待生の制あれども未だ實施するに至らず。

校長は成瀬仁藏氏、學監は麻生正造氏にして、講師には萩野、大澤、大塚諸博士をはじめ四十六名の內外教授其の任に當り、高等女學校は別に三十餘名の講師ありて熱心に教授しつゝあり。

▲學風▼

開發的主義——特性の教育と極端

已に主義あり、已に主張あり、此間また實に隱約機微なる一箇の風潮の、自ら充溢しつゝあるものなしとせんや。

學風といはんには少しく語弊あるべきか。兎に角吾人は藉を其校に有する所謂女子大學生に接するの時に於いて、まづ第一に感ずるは如何にも元氣奔逸し居る事にして、言語に於ても擧動に於いても、どことなく活々として聊か優柔不斷の態あるなし。見よ、街頭人馬絡繹の衝に自轉車を驅る彼等の態度の如何に輕快活潑なるよ。もしそれ運動服の裳裾輕るく、水をきつたるグラウンドにバスケットボールを爭ふの光景にいたりては、有髯の男子寧ろ三舍を避けざるを得ず。

而も一利のある所また弊害の伴ふを免かれず、粗暴と磊落は混じ易く、活潑と無作法は殊に相近きものにして、女子大學また此種の弊風を見るはまことに止むを得ざるに出づ、況んや創業日猶浅く、四方猜疑の眼に圍まるゝの時に於いて、みだりに其の校を議するは吾人の取らざる所なりと雖も、而も天地陰陽井々然として自らその間に秩序あり、本分あり、特色あり。秩序を踏み、本分を盡して、各々天稟の特色を發揮する是れ實に人生の常道に非ずや。是れ、是れを惟はず、個性の行く處に任じて動もすれば極端より極端に走るの嘆あるは吾人が女子大學の爲めに窃に惜しむ所也。

凡そ世に好しからざるものありとすれば、男子の男子らしからざるにあり。而も女子の女子らしからざるに至りては更に吾人をして嘔吐を催さしめずんばあらず。自轉車可なり、フートボール可なり、紅の襷かけて墨堤の花下に潜ぐも大いに可ならずや。唯だ女子として、本分と賦性を忘るゝ勿れといふ也。且つて人に聞く、去年七月女子大學の學生百八十餘名は、某敎諭の監督のもとに大阪博覽會に向つて新橋を出發せしが、車中の喧噪殆んど耳を聾せん許りにて、片腹いたき侃々諤々の不消化甚だしき議論のみならばまだしも、余の知人の前を便所へとたてる一女學生の如きは、誤りて放屁一發轟然として群客を驚倒せしめし上、顏でも赧くするかと思ひの外、件の女子大學生は一向に平氣のすまわしてヤツ失敬ッーと通り過ぎたりといふ。吾人は是れを以て學校全体を誣ゆるものに非ずと雖も、また以て奈邊の消息を推量し得べからずとせんや。

人として、婦人として、國民として、開發的主義の敎育もよし、其の所謂特性の發育を標語とする最も妙なり、唯だ祈る所は極端に走らず、賦性を喪はず、冷靜自ら持する底の實力を皷吹せむことを。是れ豈獨り吾人の希望のみならんや。

▲案内▼

入學者の資格——手續——寄宿寮片々

▲入學者の資格▼　英文豫科並びに普通豫科は共に四學年制度の高等女學校、若しくは尋常師範學校の卒業生を收容し、大學部は家政部、文學部中の英文學部、國文學部ともに修業年限五ヶ年の高等女學校若しくは女子師範の卒業生並びに是れと仝等の學力あるものに限る。尤も英文學部にありては、全然英語の素養なきものは凡べて二ヶ年の英文豫科を通過するを要す。但し英語別科は高等女學校の四年以上の生徒、並びに家政、國文學部の生徒をして隨意に出席せしむるものとす。

▲入學の手續▼　入學志願者は規定の書式により入學願書をしたため、それに履歷書を添へ、高等女學校若しくは女子師範學校の卒業生はその學校長の證明書を添付すべし。受驗料は各科を通じて壹圓(?)にして、愈〻入學の許可を得たるものは、保證人連署の入學證書に入學金貳圓を添ふるものとす。

▲入學試驗▼　修業年限四ヶ年の高等女學校、女子師範學校の卒業生に、英文豫科並びに國文學部、家政部共通の普通豫科（修業年限一ヶ年）に無試驗入學を許し、大學部の各部にては修業年限五ヶ年の高女、師範の卒業生のみ無試驗入學を許可す。附屬高等女學校は他と異るところなし。但し連絡學校として認諾せられたるは京都同志社女學校、廣島女學校、東京の三輪田女學校、大坂の梅花女學校の四校とす。

試驗課目は左の如し。

國語（讀讀、文法、作文）地理（本邦地理、外國地理）

日本女子大學

歷史（本邦史、外國史）數學（算術、幾何初步）

理科（植物、動物、物理、化學、生理、衛生、礦物）

但し英文學部入學志願者には英語を課す。

▲學費▼　各部各科の學費は左の如し。

▲大學部　年額金二十七圓五十錢分納一ヶ月二圓五十錢

▲英語豫科　仝　上

▲普通豫科　仝　上

▲英語別科　三學期金參圓、分納一學期金壹圓

▲高等女學校　年額金貳拾貳圓、分納一ヶ月金貳圓

▲寄宿寮▼　本校は帝都各女學校中、最も理想的完全に近き寄宿寮を有す。華山寮、豐明寮以下幾多の寮舍は軒を並べて相接し、可成多數の生徒を收容して善良なる家庭の理想を現實し以て社會との關係を保たしむるを期す。各寮二十六名の女生を容る、寮毎に一名の寮監ありて寮生と起臥を共にし、校内在住の校長學監と共に、父母兄姉に代りて監督の任に當り、衛生及疾病の事に關しては、校醫醫學士高田畊安、ドクトル小此木信六郎

二氏之れを監督し、女醫前田園子は日々出張して病者を診療す。又療生中より一ヶ月交代に主婦二名を撰び、專ら寮の經濟、炊事、其の他の家務を整理せしむ。寮の内外の洒掃、燈火の準備、配膳の用意等皆寮生の順番に擔任する所なり。本校が此くの如く家族制度を採用するは、生徒をして自奮自修の精神を以て、家族同樣の共同生活を營み長幼相扶け、歡苦相分ち、知らず識らずの際に良妻賢母たるの素養を積ましめんとするに外ならず寮費月俸は、時價によりて高低すべきも、目下の規定は左の如し。

▲寮費　一ヶ月金五拾錢

▲賄費　仝金六圓五拾錢

目下附屬の高等女學校を除いては、大學部の學生の殆んと凡べてが寄宿寮にあり。通學生の如きは實際指を屈するに過ぎず。

▲片々▼　時を定め、機に應じて科外講演を開く。講師としては、坪内博士、井上博士、青山博士、三上博士、中濱博士あり。朝野の名士の講演も月に幾度となく優しき拍手に迎らるるを聞く。

校内には各種、團体の會合あり。全科を通じて縱の會、横の會なるものあり。各部の仝級（たとへば國文、家政、英文の各三年級）生を以て組織さるゝものを縱の會と稱し、學級を問はず、分科の各級（例へば家政部の一年より三年級）迄を通じたる會合を横の會と稱す。縱の會は毎週木曜日に開會、横の會は一學期に一回茶菓を喫して親睦會？を開く。

其の他各分科によりて種々なる會合あり。英文學部にては毎月一回文學研究會を開き、對話あり暗誦あり、朗讀あり談話あり。國文學部にも仝樣の催しありて、美文和歌、新躰詩の朗讀あり。家政學部には研究會と稱して、毎月一回學理上及び諸種の實地上より家政の改良に資するの目的を以て諸種の事項を研究するものと、談話會と稱して毎週一回相集り、相互に胸襟を開き、各自の心情

を吐露し、各自の境遇を物語り、相互に勵み、相互に慰め、互に相戒めて正しき道に進まん事を期するものとの二種あり。いづれも特色ある有益の會合なりとす。

▲体育の狀況を擧ぐれば、敎育体操には自轉車と薙刀の練習あり。容儀の敎育としては小笠原流の女禮式、石州流の茶の湯あり。遊戯体操としてはロンテニス、女子ベースボール、クロッケー、バスケットボール、スカーフ、千鳥競爭等あり。いづれも非常なる進歩發達を示して今や都下有數の盛況を呈するに至れり。現に昨秋の大運動會の如き、來會者は朝野の紳士貴婦人を通じて無慮五千百余名、滿都の新紙いづれも筆を極めて稱揚したるは人の知る所也。

更に寮内に於ける寮生の行動をあぐれば、敎室の掃除はもとより、炊事の末に至るまで悉く是れを實踐躬行せしめ、其の他學校に來賓あるか、紀念卒業等の式日には、生徒は皆奮つて各々其の仕事を分擔し、會場乃至來賓控席等の裝飾より、菓子や和洋の料理等に至るまで悉く其都度〳〵に處辨する也。

▲講師▼

三宅大塚博士——浮田和民氏——雨江殘花二氏

殘燈かげ暗くして鷄鳴ほのかに相傳ふ、さらば曉の鐘鳴らむまでのしばらくを、力めて此の稿を了らん哉。

十一博士、三文學士、内外の講師を通じて四十六名の講座は、各々別樣の趣味を以て生徒の間に喧傳せらるるを見る。

前帝國大學醫科大學長醫學博士三宅秀氏の衛生學に於ける、彼が明治十年の頃已に早く病理總論を著はして盛にバクテリヤの新學説を皷吹したる當年の面影髣髴たるものあり。帝國大學敎授文學博士大塚保治氏の西洋美術史に於ける、其の造詣の深遠なる大に傳ふるものなくんばあらず。更に文學博士の稱號と、帝國大學敎授の榮職を敞履の

如く却けて、われは一早稲田大學の講師を以て滿足也と稱して、依然清貧を樂しむ浮田和民氏の西洋史に於ける。其他、殘花戸川安宅、雨江鹽井正男兩氏の國文學に於ける、生徒間の好評嘖々たるものあり。巾幗の三輪田女史は漢文を擔當し、柳澤米子氏は英語を教しふ。井上、村井、高島の諸氏また聞ゆ。渡瀨博士、奥田博士、大澤博士皆名聲學海に轟けるものに屬す、而して成瀨校長はもと基督教會の熱心なる牧師として、今や極めて如才なき倫理教育の講師たり。

▲舞臺▼

良妻として——賢女として——スキートホーム

三年は夢の間に過ぎて、當年氣鋭の女學士諸子が、今や欣々として卒業證書を握りたりとせよ。蛇茶お納戸の袴を取り去りしとせよ。丈の振袖半短かく、束髪のたぼ長く丸髷に結ひかへられたりとせよ。更に友禪縮緬の花形模樣、燃えるやうな着紐長き赤坊の御母樣となりたりとせよ。彼の女は社會の舞臺に立ちて果して如何なる貢献をなすべきか。

さはれ是れ自ら別問題なり。吾人はまづ彼の女の『今』に就いて、其の舞臺の上に如何なる成果を結ふべきかに注意せざるべかず。

抑も日本女子大學は、極力彼の女に教へて良妻となるべく賢母なるべく、少くも其の素養の幾分を附與したるは疑ひを容れざる所也。但だその素養は單に一個の理想を其腦裡に刻みたるに過ぎずとせば、恐らくは社會に出づる其第一歩に於いて得意の自轉車を乘り覆へすべく止むなきを保せざるのみ。思ふに人の一生は實に是れ矛盾の生涯なり、理想は常に現實と衝突し、幾多の小波瀾は間斷なく社會の表面を循環す、此の間にありて無經驗なる是等女學士は如何なる態度を取るべきか。ヲムレッに月見玉子に、鹽化ナトリウムのグラム分子をはかり盡し得ざるが如く、多岐なる社會の出來事はいつもその理想を破壞し盡さずんば止ま

ざる也。女子高等師範の生徒が獨身生活を主張するに反し、却つて家庭の和樂に嘔歌する女子大學生の、妻として夫に對する時、嫁として舅姑に對する時、人類社會の壓迫と戰ひ、種々なる境遇の苦痛に耐へ、最後の勝利を歡笑のうちに收むるを得べきや否やは、須らく開かるべき彼等の前途の舞臺に徴せざるべからず。

謙遜と寛容は家庭の和樂には最大の要素なり。機轉と愛嬌は主婦として金科玉條なり。謙遜と寛容は卑屈を意味せず、機轉と愛嬌は輕薄を意味せず、兩者相俟つてそこにいはゆるスキートホームを現出し來るべき也。一言を新進の女學士諸子に餞けて此の稿を結ぶ。

明治三十七年二月二十四日曉五時稿了

前號の誌上『蟲籠』欄の材料を御寄送願ひました處、早速武藏の瀧島孤月君岩手の涼堂君北海道久米みさ子君、名古屋の堀江巖次郎君、羽前の龜浦君、兵庫の北垣君、信濃の畝傍ふぢ子君滋賀の秋田君から御寄稿がありました、いづれ折を見て面白いのを紙上で御披露する事として、尙ほ續々御寄送を願ひます。（塙生）

蟲籠

瀧島孤月生

(九)花子さん

高等師範小學校のお花さん、圓ぽちやの愛嬌たつぷり。何ともいへない口元の可愛いらしさ。

ある時學校の先生より新年が來たと聞いて、どうも不思議でたまらなく、早速お母樣の膝をゆすぶつて、

『お母さん、あの、あのね正月はどこへ來たのでせう？』

『お正月——？』

お母樣當惑の、……花さんの髮を直してやりながら、

『さあ——、お正月は目に見えませんよ！』

『あら、あら、だつて先生がお正月が來たつて言ひましたもの！』

＊　＊　＊　＊　＊

花子さんはお嫁にゆくまでかく言ひてひやかされき。

新刊紹介

▲鐘樓守（故尾崎紅葉氏譯）　鐘樓守上下二卷七百餘頁は西洋世世文壇の巨人ユゴーが傑作の佳譯たり、かくばかりにても此の一篇は永く世に傳はらんの價格あるべし、然るを況んや今樣小說の泰斗、一代の才人、故紅葉山人が絕筆なるをや。云々。とは坪內博士が此の書に序ぜられた文字の一節である。以つて此の書の價値を伺ふことが出來るであらう。紙質精良、製本善美を盡し且つ斬新の意匠に依れる三色版數葉が挿まれてある。（定價上卷九拾錢、下卷壹圓、早稻田大學出版部發行）

▲バイブル物語（中村春雨氏編）　本書は舊約聖書の中『創世記』『出埃及記』以下數篇を取つて、成るべく歷史的に發達の系を辿り、エデンの樂園の人類創造以來、此の天性宗敎心に深いイスラエル民族の祖先アブラハムを始め、偉なる人物、興味多き事蹟などを書き縮めたもので、苟くも文學に志すもの、宗敎に志すものは勿論、何人も知つて置かねばならぬ好著述であらうと思はれる。例の『通俗世界文學』の第八編で、例に依つて參考となるべき多くの挿畫が挿まれてある。（定價二十錢、東京神田裏神保町合資會社富山房發行）

▲クロック術（櫻井溟城氏編）　室內遊戲クロック術の起原特長、用具の說明、競技の方法、競技上の實語、勝負の二二例等を述べたものである。諸子の宜しく一讀して競技の參考に供すべきものであらう。（定價十二錢、東京神田裏神保町光風館書店）

▲最近米國成功十傑（石井白露氏著）　米國最近の大成功者カーネギー、モルガン、ロックフェラー、ジエームス、ヒル、シュワツ、ブクラーク、ヂユーク等十傑の人と爲りを詳しく述べ且つ各〻が如何にして成功したかを至極興味あるように書き記したものである。誠に著者の自序にも有るように「成功は努力の結果である」。この書は如何に之れ等の十傑が努力して成功したかといふ所以を詳しく述べたものであるから、成功に志す諸子一讀を要するものであらう。（定價五十錢、東京麴町有樂町三丁目實業之日本社發行）

▲品性の光輝（岳淵生著）　時代の覺醒、國民の品性、青年の危險、品性の勢力、品性の人、吾人の品性主義、品性の修養等に分かち、いかにして人間らしき人間となるべきかを論じたものである。前記「成功十傑」を併せ讀んだならば得るところ少なからぬことゝ思ふ。（定價卅五錢、同上發行）

▲よものあか（上田博士校訂、蜀山人作）　『名著文庫』の十二篇である。天明より文政かけての狂歌狂文界の泰斗たる蜀山人の狂文集は即ち此の書である。（定價二十錢、富山房發行）

庭球術（ロンテニス）

試合の方法

笠正澄

サーブの方法――各手の名稱――フオールトの場合――レットの場合――サーブ球の打ち返し方――インプレー中に於ける球の打ち返し方――インプレーヤーが一勝點を得る場合――アウトプレヤーが一勝點を得る場合――兩軍が一點を失ふ場合――球庭を變へてサーブする場合――球手となる順序、

「サーブ」（Serve）とは第一に球を打ち出すことを云ふのである。

「サーブ」を爲すには、一脚を「ベース」線外（第一圖のA.B及びC.Dに置き、他脚を「ベース」線上か或は其線內に据ゑて、而して球を空中に投げ上げ其の落下しつつあるものを瞬間に「ラツケット」にて打ち、對角線的に反對の球庭內に打ち入るゝを目的とするのである、「サーブ」は「ベース」線の中央より二呎乃至六呎の間に直立して行ふものである）。「サーブ」は始め必ず右球庭より敵の右球庭に向つて行ひ、次に左球庭より對角線的に敵の左球庭に送るものである。

球庭の方向の撰擇權、即ち網の何れの側を占有するか、又孰れか先きに「サーブ」をするか、即ち「サーブ」の先得權は、大概抽籤にて定むるものである、通常抽籤で勝ちたる方が「サーブ」を行ひ、負けたるものが球庭を選ぶ、されど、時としては、此の反對に選ぶこともある、又た抽籤の代りに「ヂャン」拳で決することもあるが、此等は何れにしようが戲友の勝手である。

Server（球手）とは、始めにラツケットで敵庭內へ球を送るもの、即ち「サーブ」をなすものを云ふ。

Stricker out（受手）とは「サーブ」球を打ち返すものを云ふ。

Partner（仲間）

In player

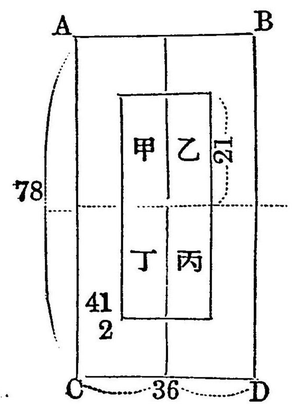
とは、他の戲友の事を云ふ。

とは、球手の方の組を云ふので、受手の組の方を out player と稱するのである。

「サーブ」球は、決して不意に送る事を許さない、豫め敵方の受手が準備整ひたるや、否やを確めた後でないと、例へ其の球は正當なる球庭内に落つるとも無効である、其を知るには、持ちたる「ラッケット」を高く差し擧げるので、敵方の受手にても同じことを行うて相鬪をした時には、始めて準備が整ふたものと見做して、「サーブ」を行ふのである、しかし、受手が用意せない時に打送したる球は、無効で、計算上何の關係もない、唯だ「ヤリ」直すのみである、が、斯樣な不正な球を受手が受け、或は打ち返さんとするときは、有効なるものと見做すのである。

(抽籤、或は「ヂャン」拳の勝敗により、戯友は各々一個の「ラッケット」を携へ自己の球庭に就き、劈頭第一に甲なる戯友がサーブを爲すと假定すれば、彼れは「サーブ」の方法によつて、ベース線の中央より右方二呎乃至六呎の處に立ち、(右球庭)、一脚を「ベース」線上、或は同線内に据ゑ、

他脚を其の線外に置いて、受手の丙が用意整ひたるや、否やを「ラッケット」を擧げて確めた後ちに球を空中に擲上げ、「ラッケット」の面にて對角線的に反對の戯友丙に向つて打送するのである、若し過て丙球庭内に入る、事が出來なかつたとき、即ち球が網に遮られて、反跳へるか、或は丙球庭以外の地に落下したときは、之れを「フォールト」(Fault)と云ふ、併し、丙球庭を區劃する線上、(「サーブ」線と「サーブ」側線及び「ハーフ、コート」線)に落ちたる球は、舊式では「フォールト」(過失)と見做せしも、其後改めて正當なる球とすること、



なつた、偖て始めの「サーブ」球が、「フォールト」となつたときは、再び同じ位置より球庭に向つてサーブをなすのである、(不正なる球庭から送りたるもの、例へば右球庭よりなすべきものを、左球庭よりなしたる場合は、次の「サーブ」は球庭を變へて正當なる場所より出すものである)、ところが、此の二度目の「サーブ」球も、不幸にして、正當なる球庭内に打ち込むことが出來なかつたときには、球手の組は一勝點を受手の組に得られたので、つまり球手の組が一點負けたのである、であるから、「フォールト」を二度續けたときは、球手の組は一點の負となる。

左の如き場合にはフォールトとなる、而し、「フォールト」は、サーブ球に限られて居るので、決して「インプレー」(競技中)中の球にては、「フォールト」と云ふものはない。

(a)「サーブ」球が網に衝突して、敵の球庭内に入らなかつたとき、

(b)「サーブ」球が、「サーブ」線外に(敵庭の)飛び過ぎたるとき。

(c)球手が規定されたる「サーブ」の姿勢、及び位置を失ひて、球を打送したとき。

(d)「サーブ」球が、正當なる球庭内か、其の區劃線上に落ちなかつたとき。

續いて二度「フォールト」をなすときは、一點を失ふて球手の組は一點の負けとなるが、一度の「フォールト」にては、計算上何等の影響もない、例へば、始めの「サーブ」球は「フォールト」となつても、次の「サーブ」球が有効なるものでさへあれば、最始の過失、即ち「フォールト」は自然消滅するのである。

爰に一の疑問の起るのは、球が「ネット」の頂上を摩して、反跳することなく、「スル〳〵」と敵庭内に落下したときで、舊來の規則では此の「サーブ」は適良であつたが、其後規則を改めて、斯かる「サーブ」球を(落ちたる球庭の正否を論ぜ

す)。「レット」(Let)と唱へることゝなつた。併し「レット」は、勝負計算上に、何等の影響もない、言ひ換えれば、受手が未だ準備をせないのに、送りた球と同じく、「サーブ」を「ヤリ」直すのみである。であるから、始めに「フォールト」となり。次に「レット」となつた場合には、初めの「フォールト」のみを計算する。

球手の送りたる「サーブ」球が、「フォールト」であるにも拘らず、受手が之れを受け、或は打ち返さんとするときには、有効球(正當なる球庭内に落ちたる球を云ふ)と同一に見做すのである。

さて其「サーブ」球が規則に適ひ、「ネット」を超えて丙球庭内に入りたりと假定せよ、丙球庭を守護する敵の受手は、其球を「フワールスト、バウンド」(First bound)にて打ち返さなければならぬ、詳しく言へば、飛び來る球を、未だ地上に落下せざる間に、之を打ち返へすことを禁ずるので必ず球が一度地上に落ちて反跳つたるものを打ち返すのである、であるから、受手が送られたる「サーブ」球を「ブオレー」(Volley)(ブオレーとは未だ地上に落ちない球を云ふ)で受け止むるときは、受手の組が一點の負けとなるのである、しかし、打つ球の高さには毫も制限はない、唯だ其球が敵庭内へ落つる樣に打てば宜ろしいのである、爰に注意せなければならないのは、送られたる「サーブ」球を、受手の代りに他の者が打ち返へす事で、(四人試合及び三人試合の場合)、例へば甲が丙に向つて送りたる「サーブ」球を、丁が横合より出でゝ打ちたる場合で、斯樣な球は其の正否を論ぜず無効であつて、無論受手の組が負けとなるのである、

今度は球手の組が球を打ち返す番である、此の時には其組の誰れか球を打つとも隨意で、味方の兩人相助け合ひて打ち返さなければならぬ、併し其の球を打つには、飛び來りつゝあるもの、即ち「ブオレー」にては、「フワールストバウンド」でも勝手で、唯だ敵庭内に打ち入るれば宜いのである、

此度は受手の組だ、此時は前球手の組がなせし如く、唯れか打つても宜しく、且つ球を「ブオレー」でも又は一回反跳の球にても勝手である、斯樣な球をインプレー(Inpley)(競技中の球)に於ける球と稱する。

斯の如くして試合は開始せられ、兩軍の將軍は一生懸命で、各々秘術を盡し、互に球を打ち返へすのである、而して孰れかの將軍が、球を網に打ちつけるか、或は正當なる敵庭内に入るゝことが出來なかつたときか、又は球を打ちはづすとき迄は、中止することが無い、處が爰に一つ疑問の起るのは、競技中の球が網の頂上に觸れて敵庭内に落ちたる場合だ、「サーブ」球では斯樣な球を「レット」と唱へて「ヤリ」直したが、競技中のものは、恰も網の上緣を摩せずに、敵庭内に落ちたものと同一に見做すのである。

左に「インプレヤー」が、一勝點を得る場合を示さう。

庭球術(ロンテニス)

(a)。受手がサーブ球を「ブオレー」で受けたとき。

(b)。受手の組のものが「サーブ」球か、或は競技中の球を打ち誤りたとき、換言すれば、打ち返した球が、球手の球庭以外に落ちたるとき。

(c)。受手の組が、左に示した兩軍一點を失ふ條件に相當する失策をなしたとき。

「アウトプレヤー」(受手の組)が一勝點を得る場合。

(a)球手が續けて、二度「フォールト」をなしたるとき。

(b)球手の組のものが、競技中の球を打ち誤りたるとき、即ち打ち返へした球が受手の球庭内に落ちなかつたとき。

(c)球手の組のものが、左の示した兩軍一點を失ふ條件に相當する失策をなしたとき。

兩軍が一點を失ふ場合を左に示そう。

(a)戯友が持ちたる「ラッケット」で、二度以上球を打ちたるとき。

(b)戯友の身体が競技中、網或は網を支持する棒に觸れたとき。

(c)球が戯友の身体か、或は衣服、帽子、靴等に觸れたとき、但し「ラッケット」に當つたものは、此の限でない。

(b)未だ我が球庭内に來らない球を「ブオレー」で打ち返へしたとき。

球手は一勝點を得るか、又は一點を負けたときには、球庭を變へてサーブをなすのである、例へば圖に就いて、球手甲は初め右球庭から「サーブ」球を丙球庭へ送りたるに、爰に勝敗を決したので今度は味方のものと位置を取り換へて、左球庭の規定の位置に立ち、「サーブ」球を敵の丁球庭に向つて打ち込むのである、此時敵軍では、丁が受手となって、其「サーブ」球を規定の方法で、敵庭内に打ち返さなければならぬ、であるから、球手の組は一點の負け勝ちにて、互に位置を取り換ゆるが、受手の組ではそうでなく、交互に受手となるのである、而して敵から二點勝つか、或は敵に二點勝ち超さるゝまで即ち一ゲームの終るまで、球手は次の球手に球手權を譲らないで、右球庭、左球庭、と順次に其位置を變へて、「サーブ」をなすものである。

先づ爰に一ゲームが結局だと假定したならば、第二番目のゲームに球手となるものは、誰であろう 第一番目のゲームのとき、最初に受手となった敵の右球庭を占有して居る丙である、而して此ゲームで、最初に受手となるものは、第一ゲームでの球手である、第三番目のゲームでは、第一番目のゲームで球手となったものゝ相手で、第四番目には、第二ゲーム球手となりたものゝ相手（左球庭を占有するもの）である、以下此順序で戰の終局まで續行するものである。

雜録

落花之譜

村羊生

（一）菫さく野

菫さく青山の墓畔、春の御光りほのぐゝと、紫の香野にみてり。

ふと見れば、――紅葉そのまゝの掌に椿の一枝、眼さめるやうな菫の一束をそへて、燃え立つ友染縮緬の被布袖ながく、六つばかりなる可愛い垂髪のお嬢ちやま、繪にして見まほしの桃色なす頬の色、紅のリボンひら〳〵とさながら蝶々がまふかとばかり。

『お嬢ちやま、そのお花はどう遊ばすの？』

ぱつちりした、玉のやうな瞳に、何となく淋びしく仰いで、

『お父様へ捧げるの！』

『お父様へ？ 嬢ちやまのお父様はどこへ被在しつて？』

『あの……』とまではかすかに答へしものの、小さき胸のさすがに涙ぐんで、あとは得言はず菫の花束左手にうつし、無言にうなづいてそと指させる樹のかげ――！あゝ白い新らしい一基の墓標には、見よ墨痕あざやかに海軍△△功△級△△△△之墓！

思はずわが瞳はあらぬ方に走りぬ。

花の梢に風そよめいて、ゆるき流れにうかぶ花の一とひら、あまたたびくる〳〵とめぐりてながれて、なかれてめぐりて、さて靜かに小川の流にともなへり。

お名はきみちやんといふの。

(三) 鐘の色

散る花を雙の袂に——。

おもかげ橋のおばしまに、芙蓉のふすま、春雨のよべにして、花にうらみの風の色、そのあで人の夢ならでは通ふまじき夕の鐘にたゝずむの時、三百里外都の春に背さし友と、湘南の月の海に、關八州の夕をこめて、呼ぶか閻浮の魂の聲、ほのかに響く夕の鐘を、神のともなれの御歌のふるへにはゝ笑みしその夕を思ふ。

祈るらくは此のゆうべ、宇賀のうら波とこしへに、その鐘の色に光あれ。

(三) 花のさが

かりそめの、たゞかりそめの花のさがなり。

神ゆるしなくばその一ひらも散らず。

白雲まよふ三千里、たゞかりそめの御わかれを、ゆるせ、わかき血しほのおごり也。

さらば笑みて、笑みてこそむかへ、ゆく春の光りを。君。

(四) あけぼの

その色のむらさきなる、曙の御星いふ。

『安らに!』

みどりの笑みをうかべて、暮の御星こたふ。

『神常にきみと!』

雞のやこゑにひんがしの空まづしらみわたりて

おぼろ〳〵にあけゆく花の曙、春のひかりは天地にみちわたりゆく。

(五) 稲荷祠

破れはてし垣根のわたり、はやくも春風そよめきわたれば、をちこちに緑の色もちら〳〵と、若草のかほりたとしへなくもやはらかなる哉。

芝生のかげに老ひたる梅の一株あり。

梅の根下に、小さなる祠一つたてり。

稲荷やまつれる。いく年をこゝに、耳のかけたるお狐の、寶壽の珠を銜んで、泰然として鎮坐ましますが見ゆ。

春の御つかひ、しろがねの鞭ゆるやかに打ちふり給へば、南枝まづ笑む梅一輪。そのあしたより、朝あさな、春はこゝにも——美くしき鶯の、枝より枝に、花より花に、春を宣じてたのしげに吟しゆくよ。

第一期第一講話集講上始めて諸君と相見えしより、年を閱すること三年、號を重ぬる事二十四號、此間遜幼生として、常に親愛なる諸君と相見ゆるを得しは深く光榮とする所、而も冗文贅辭聊も諸君に寄與する所なかりしは深く慚愧に堪えざる所也、今や本誌の休刊と共に暫く別離の秋をわかたんとす。玆に謹で諸君の渣福を祈り、併せて深厚なる諸君の同情に向つて滿腔の感謝を表す。前途遼遠請ふ邦家の爲め自愛せよ。(村羊生)

小供の手紙

江村生

○

東京では戰の事で大さはぎでしょう、號外のさはぎてねぶられないでしやう、日本はつよいからきつと勝ちます。それに露西亞の樣な大きな國と戰をしてかてば軍艦の山車でも大砲の山車でもきつとこしらへるでしょう。(八年二ヶ月)

○

東京では戰爭の事でえらひでしやう、夜晝號外がちりん〳〵〳〵〳〵と隨分うるさいでしょう、しかし日本は神樣の國だから強いですねー、日露戰爭だつてありんぽうと狸が戰爭する樣なものであります。(十年一ヶ月)

○

私は去る日曜日に善一さんの家に行きましたら美麗な〳〵又きれいな花がさいていましたから、あれは何の花でありますかと尋ねました、そうしたらあれは紅梅の花と申しました、それから後紅梅の花を三枝もらひまして家に歸りました。(十年一ヶ月)

○

正さん裏の淵へ氷がはつてみょ(水鳥)の居どころがなくなつた、おつだが岩ころな氷の上へなげると遠くの方まですべつて行つて面白い、東京も寒むかつべ。(十年一ヶ月)

私立大學紹介

慶應義塾大學

芙鳳生

▲序言▼

會員諸君。

今や本誌の最終刊に於いて、吾人が諸君と約したる『私立大學紹介』の結尾として、玆に慶應義塾大學を紹介し、一と先つ不完全なる此の稿を終らんとす。過きし二年の間、殊に此の種の乾燥無味なる非文に對し、猶ほ諸君が屢〻親厚なる同情を寄せられたるは、吾人が實に心より感謝に堪えざる所にして、走筆の間幾分なりとも諸君の參考となりしものありとせば、余が滿足之れに過ぎたるはなき也。

一、位置

▲三田の高臺——品海の瞰望▼

慶應義塾は東京芝區三田臺上にあり。

帝都三大公園の一たる芝の公園に近く、千古の美名を竹帛にたれ、千載猶ほ義士の摸範として仰がるゝ赤穗四十七士の骨を奠むる泉岳寺を去る事甚だ遠からず、三田の高臺、綠林欝蒼たるのほとり蔚然たる大建築は是れなむ、福澤雪池先生が終生の熱血を傾倒してその經營につとめたる慶應義塾及校舍なりとす。

幾年を浮世の雨風にさらされたれば、その建築は到底赤門牛門の輪煥の美に比ぶべくもあらずと雖も、而も遠く七砲臺邊萬波漂渺として、白帆三四夢の如く横はる品川灣の大景を双眸の裡に收め黄塵萬丈の都門を離れて、高く滿都を下瞰する大觀にいたりては、蓋し是れ到底他に求むべからざるの好位置にして、さすがは福澤翁の地を此の地にトしたる、その遠謀また欽すべきに非ずや。

二、組織

▲理財科——豫科——設備▼

慶應義塾の首腦はいふまでもなく大學部にありて、幼稚舍、普通部の如き言はゞその楷梯と見て可也。

大學部は理財學科、法律學科、政治學科、文學科の四科より成り、その修業年限はいづれも五ヶ年にして、早稲田大學に比して半ヶ年長し。最も評判よきは理財科にして、此の出身者にして社會の表面に嶄然頭角を表はすもの擧ぐるに遑あらざる也。

五年の内二年を割いて豫科と稱し、普通學、語學等の學科を授け、主として經濟上の實際的志望を注入す。本科に入りてはじめて各々志す所の學を專攻せしむ。

目下學生の數約六百名、入學を望んで得ざるもの年々數百名に達すれども、學校の設備上自ら限りあり、充分その要求に應じ得ざるは當局者の遺憾とする所なるべし。

學年は毎年五月一日より始まり、翌年四月三十日に終る。一學年を三學期に分つ。

三、案内

▲資格——手續——學費▼

▲資格▼ 慶應義塾普通部の卒業生は無試驗にて入學せしめ、他中學の卒業生は英語の試驗のみを課する事となし、是れと仝等の學力あるものも、仝課目の試驗の上入學を許可す。

▲手續▼ 入學願書は美濃紙にして、受驗料は大學部は壹圓、普通部は五十錢也

▲學費▼ 學費の年額は左の如し。

一金四拾圓五拾錢

內譯

一金三拾六圓 月謝年額(一學期分拾二圓)

一金參圓 教場費仝(仝 壹圓)

一金壹圓半 體育費仝(仝 五拾錢)

一金參拾八圓半　一ヶ年舍費（一ヶ月三圓半）
一金五拾五圓　仝　賄料（仝五圓何れも八月分を除く）
合計金百參拾四圓也

以上は主として寄宿生を標準として調査したるものにして、右の外被服料を除き、書籍及び文具代、入湯、散髮、各種の會費、旅費、襯衣、股引、シャポン、手拭等の雜費一ヶ年約六拾圓を要するとすれば、結局一ヶ年合計二百圓（一ヶ月に割り當つれば拾七圓强となる）を要すべく、私家寄宿及び下宿屋住ひも是れと大差なかるべし。

四、寄宿

▲日本一の寄宿舍——舍風▼

慶應義塾に於いて最も世に誇るべきものありとせば、そは講堂にあらず講師にあらず、また喝采湧くが如きその講座にもあらずして、實に寄宿舍の完備にあるべし。

塾にては可成的寄宿舍に收容するの方針を取り居る事故、その設備に至りても到底他校に於いて摸すべからざる規模を有す。寄宿舍の全室に於いて約四百人を容るべく、室は自修室と寢室にわかたれ、自修室には倚子、テーブル、寢室には寢臺を用ゐ、各室電燈をともし、之れを暖むるにスチームを以てす。

寄宿舍は友愛寮、清交寮、自信寮、自重寮、進取寮、確守寮の六寮に分かたれ、數名の舍監ありて寄宿生の起居、眠食、副課自修、金錢の出入その他百般の監督をなす。また一年に數回舍監自ら卒先して遠足若しくは茶話會を催し、或は塾長以下教職員を招き、晩餐會を開く事あり。教師學生打ち雜りて談笑を縱にする樣、宛然一大家庭を見るが如し。

五、會合

▲演說館——各倶樂部▼

正面本館の傍らに一棟の會堂あり、建築左まで

宏壯といふべからずと雖も、是れ即ち日本に於ける演說館の嚆矢也。三田演說會は明治八年開館以來今日に至るまで、約三十年間、連綿として月次演說を繼續す。初めは公衆に對して學術政治の講談をなせしか、近年は塾生の數著しく增加せる爲め毎月二回單に塾生のみを集めて、塾の先輩より重に修身上の講話をなし、或は塾生をして演說討論等をなさしむ。是れまた義塾教育機關の一要部と見て可也。

塾生の間には一、レクチュア、二、社交、三、英語、四、大學五、バンソット各倶樂部、五、ワグチルソサイチー、七、三田談話會等あり。一は主として學者流の人を招きてその講義を聽き、二は政治家實業家の卓說を求め、五は繪畫寫眞等の技術、六は音樂を研究し、三は新舊の學生及び教員より成り、七は塾生中の有志者より成りて、教師及び重なる出身者を招待してその談話を聽き、相互の親睦を圖る、擬國會の如きも本塾のはじめて開設したる所にして極めて有益の會合たり。

その他塾生の手になる雜誌にては、三田評論あり、一學期二回乃至三回、即ち一年に八回刊行す。その編輯、會計、發行等一切塾生の手に成るものにして、之れによりて學生間の氣脈を通じ、兼ねて文章を研修し、思想を練磨するの機關とせり。

邸內には一の倶樂部あり、塾生が茶を喫し、菓子を食しながら隨意に談笑する所にして、社交の快樂を加へ、友誼を厚くするの利益少からず。是れに大浴堂及び理髮所を附屬せしめ、外に筆墨紙等の小間物店及び靴の修繕所あり。是れ等はいづれも塾の風紀を維持するに於いて最も有益なる設備なり。

六、片々

▲講師——學風——體育——舞臺▼

學風、講師、舞臺等に就いて語るべき事非常に多きも紙數の都合上、到底之れを詳すべからず、

止むなく片々と題してその概略をしるすに止まらむ。

▲講師▼　本塾の講師は主として塾出身者を用ゆるの風あり。こは早稲田大學其の他の、博く人材を天下に求めて、其の講座を賑はすものに比して甚だ物足らぬ感なきを得ずと雖も、而もまた一方より言へばその校出身者は自然愛校心も深き事故一概に排すべきものにもあらざらむ。

講師中の主なるものは神戸氏の憲法、川合氏の心理、教育、堀江氏の哲學經濟、青木、氣賀、名取諸氏にして、其の他頃日佛國より歸國せし田中一貞氏あり。塾長は鎌田榮吉氏也。

▲學風▼　學風に就いては言ふべき事多々なるも一言すれば貴族的平民主義にして、學生間には一致協同の精神盛也。

▲圖書館▼　義塾の圖書館には和漢洋の書籍約壹萬冊を藏す、法律、經濟、政治、文學等に關する著書、辭書類は殆んと完備せり。

▲體育部▼　體育會は全校の生徒によりて組織され、部門をわかつて各々好む所の遊戯をなさしむ。端艇部、劍道部、柔道部、野球部、庭球部、弓術部、水泳部、自轉車部等あり。いづれも都下有數の精鋭たり。

▲舞臺▼　人あり、慶應義塾出身者の舞臺を問ふ。某氏答へて曰はく、經濟界に於いては高等商業と對峙して二大强國の觀をなす。實業界に於ける將來の運命に至りては實に有望といはざるべからずと。吾人は多く言はざるべし、政治界に於いて尾崎學堂、犬養木堂を有せる塾の名譽は、實業界に豈一人の中上川彦次郎を惜しまんや。

此の稿こゝに完結す。

數學片々

代數の極大極小

H、K、

爰に$a+x^2$といふ代數式ありとせよ、aは一定數にして變化せざれどもxは變數とて種々の値を有するものである、今xを實數即ち虚數でなきものとすれば此$a+x^2$が有する極小の値は如何といふにaに加ふべきx^2の小なる丈け其和は小である、而してxが實數なる限りは如何なる數にても之を平方すれば常に正なるを以てx^2は決して負となるを得ない、そこでx^2は零より小なるを能はず、今$x^2=0$とすれば$a+x^2$はaとなりて此式の有する極小値なりとす、

又$a-x^2$の極大値を求めんに此式はaよりx^2を減ずべきものであるからx^2の小なる丈け殘りは大なり故に前の如くにx^2は零より小なることを能はざるを以て$x^2=0$とすれば其極大値はaである、

例1、$14x-x^2$の極大値を求む、但しxは實數とす、

解　xに就きて平方式と爲さん爲めにxの係數の半分の平方を加へ又減ずれば

$$14x-x^2=-(x^2-14x)=-(x^2-14x+7^2-7^2)$$
$$=-\{(x-7)^2-7^2\}=-(x-7)^2+49$$
$$=49-(x-7)^2,$$

かくの如く變形したる最後の式は49より$(x-7)^2$を減ずべきものであるから$(x-7)^2=0$なるとき與へられたる式は最大にして即ち49は求むる所の極大なる値である、又與へられたる式をして極大ならしむる所のxを求むるならば$x=7$である、

例2、$3x^2-5x+2$の極小値を求む　但しxは實數とす、

解　$3x^2-5x+2=3(x^2-\frac{5}{3}x+\frac{2}{3})$
$$=3\{x^2-\frac{5}{3}x+(\frac{5}{6})^2-(\frac{5}{6})^2+\frac{2}{3}\}$$

$$=3\{(x-\tfrac{5}{6})^2-\tfrac{1}{36}\}$$
$$=3(x-\tfrac{5}{6})^2-\tfrac{1}{12},$$

加ふべき $3(x-\frac{5}{6})^2$ が零なるとき與へられたる式は極小にして其値は $-\frac{1}{12}$ である、而して極小ならしむべき x の値は $\frac{5}{6}$ である、

別解　求むる所の極小値を y と命ずれば

$3x^2-5x+2=y$ となる此方程式より x の値を求むれば

$3x^2-5x+2-y=0$ とし、それより

$$x=\frac{5\pm\sqrt{5^2-4\times3(2-y)}}{3\times2}=\frac{5\pm\sqrt{1+12y}}{6},$$

而して x は實數なるを以て $1+12y$ は負となること能はず、そこで $1+12y$ は零より小ならず即ち $1+12y\geqq0$

即ち $\frac{1}{12}+y\geqq0$ 即ち $y\geqq-\frac{1}{12}$

此最後の式は y は $-\frac{1}{12}$ より小ならざるを示すもので少くとも $-\frac{1}{12}$ に等しくそれよりは下ること能はず因て y の極小値は $-\frac{1}{12}$ である、

例3、長さ十尺を二分し其二分の包む矩形の面積をして最大ならしめよ

解　求むる所の矩形の一邊を $\frac{10}{2}+x$ とし他の一邊を $\frac{10}{2}-x$ とすれば矩形の面積は

$(\frac{10}{2}+x)(\frac{10}{2}-x)$ 即ち 5^2-x^2 である、偖此式の値の極大は x^2 の零なるにあり因て 10 尺を二等分して各邊としたるとき即ち正方形なるとき最大の面積を有す、

例4、長さ十尺を二分し其二分の上の正方形の和をして最小ならしめよ、

解　一分の長さを x 尺とすれば他の一分は $10-x$ 尺なり此二分の平方の和は

$$x^2+(10-x)^2=x^2+100-20x+x^2$$
$$=2x^2-20x+100=2(x^2-10x+50)$$
$$=2\{(x-5)^2+25\}=2(x-5)^2+50$$

となる此最後の式に於て $2(x-5)^2=0$ なるとき與へられたる式は極小にして $x=5$ なり因て二等分線の上の正方形の和が最小なり、

$$=3(x-\tfrac{1}{3})^2-\tfrac{1}{3}$$
$$=3(x-\tfrac{1}{3})^2-\tfrac{1}{12}.$$

加ふべき $3(x-\frac{1}{3})^2$ が零なるとき與へられたる式は極小にして其値は $-\frac{1}{12}$ である、而して極小ならしむべきyの値は $\frac{1}{3}$ である、

別解　求むる所の極小値をmと命ずれば

$$3x^2-2x+2=m$$

となる此方程式よりxの値を求むれば

$$3x^2-2x+2-m=0$$

とし、それより

$$x=\frac{2\pm\sqrt{4-4\times3(2-m)}}{3\times2}=\frac{2\pm\sqrt{1+12m}}{6}$$

而してxは實數なるを以て $1+12m$ は負となること能はず、故こで $1+12m$ は零より小ならざるを示す

即ち $1+12m\geqq0$　即ち $m\geqq-\frac{1}{12}$

此最後の式は m は $-\frac{1}{12}$ より小ならざるを示すものて少くとも $-\frac{1}{12}$ に等しくそれよりは下ること能はず因て m の極小値は $-\frac{1}{12}$ である、

例3、長さ十尺を二分し其二分の包む矩形の面積をして最大ならしめよ

解　求むる所の矩形の一邊を x 尺とし他の一邊を $10-x$ 尺とすれば矩形の面積は

$$x(10-x)=-x^2+10x$$

即ち $-x^2+10x$ である、偖此式の値の極大はxの零なるにより因て10尺を其二等分して各邊としたるとき即ち正方形なるときに大の面積を有す、

例4、長さ十尺を二分し其二分の上の正方形の和をして最小ならしめよ、

解　一分の長さを x 尺とすれば他の一分は $10-x$ 尺なり此二分の平方の和は

$$x^2+(10-x)^2=x^2+100-20x+x^2$$
$$=2x^2-20x+100=2(x^2-10x+50)$$
$$=2(x^2-5)^2+2(x-5)^2+50$$

となる此最後の式に於て $2(x-5)^2=0$ なるとき與へられたる式は極小にして $x=5$ なり因て二等分線の上の正方形の和が最小なり、

御注文の節は本誌廣告に據る旨御附記を乞ふ

文科大學教授文學博士 上田萬年先生
文科大學講師文學士 上田敏先生合編

最新英和辭典

寸法 珍本頗美
全紙 一冊
數百餘頁 一千二
郵税 五十五錢
六錢

本書の内容は既に世間の認知せる處なれば又喋々の要なし要するに上田博士の該博なる英文學の造詣と相倚りて成りたるものなれば辭書として聊かの遺憾なく學生諸氏は本書を繙く毎にその特色を愈見出さるゝならん。

言文一致　全三十冊

普通學全書

既刊書目

1 日本歴史上
2 全　下
3 萬國地理
4 西洋歴史
5 東洋歴史
6 日本地理
7 法制大意
8 經濟大意
9 教育學
10 衛生學
11 商業一斑
12 物理學
13 新算術
14 農業一斑
15 簿記學
(1) 小學校卒業程度の力で理解獨修の出來得ること
(2) 學課は中學程度の課目を悉く備へ別に簿記術生農工商の一般に有用なる者を加ふ
(3) 講述は簡明適切を旨とすべき文實際社會に近づけ
(4) 及ぶべき文實際社會に近づけ
(5) 其他圖書地圖等挿入特色頗る多し

獨習者無二の珍寶！

驚くべき廉價學生の寶庫

正價一冊金廿錢郵税一錢
四冊五錢
十冊十七錢
一圓九十錢

發兌元　東京市神田區神保町　富山房

會員募集

博言博士 イーストレーキ先生講述

英語講義錄

▲英語はその方法良好なる時は完全なる自宅獨習をなすことを得

▲本講義錄は先生多年の經驗になり方法適切講述平易なれば青年諸君の自宅獨習に最便利なり

▲中學生英語講習に最好參考書たりとの評あり

▲本講義錄は初等科、本科の二科に分ち各六ヶ月卒業

▲入會金貳拾錢●會費毎月金參拾錢

▲會則郵券貳錢●見本金拾五錢

特別券（中等教育）

學期開始本月十日 第一號發行に付本月中會費全納入會金共特別金壹圓七拾錢、但此廣告を添へ申込むべし

東京市小石川區新諏訪町十三番地

イーストレーキ英語學會

轉居 業務擴張の爲め從來の事務所狹隘に付き右肩書の處に轉居す

文學博士 坪内雄藏序

青々園 伊原敏郎 著

日本演劇史

（大判コロタイプ刷及木版挿畫數十箇入）

全二冊紙數八百頁正價各金八拾五錢郵税各金八錢

特製合本洋布製正價金壹圓八拾五錢小包料金十五錢

坪内博士本書に序して曰く「其の體式の秩然たるは彼の有名なるコリャアが英國劇史に比して遜色なく其の實質の豐なるよりいふも、むしろ彼れに優れり」と、本書は實に著者が殆ど十年の苦心によりて成り其の材料の豐富なる其の觀察の精緻にして而も其の形式の整然たる確かに空前の大著述たり治に至るまでを阿國歌舞伎以來明先づ前後四期に分ち俳優と其の技藝〜を主とし、脚本と其の作者劇場的音樂、建築、舞臺裝飾、服裝、化粧、又政令及び社會との關係所々木版の圖畫を挿んで技藝、建築及び古來諸名優の肖像等を示し謂はゆる吾が國の花たる歌舞伎劇の發達變遷の跡を說くこと掌を指すが如きのみならず一面には文學史に又一面には音樂史にも渉り書社會缺くべからざるの實典たらん

發行所 東京牛込 早稲田大學出版部

發賣所 東京本日本橋區三町目 博文館

四版發賣

佛國文豪
早稲田大學講師

長田秋濤（ゾラ）原作譯

文學叢書

椿姫

十九世紀の大文豪ヂューマが『愛すべき人にして世の愛する所とならざりし薄命の人』に向ひ無限無涯の同情の涙を濺ぎかけ同時に『愛すべき人を愛せざる社會』を責めたるの傑作は歐米十八ヶ國に歡迎飜譯せられたるもの而して秋濤居士が親友なる故紅葉山人が臨終の大作にして本大學出版たるヴィクトル、ユゴー作ノートルダームドパリー（鐘樓守）と相待て十九世紀五大傑作の一として讃和唱導せられたるものなり苟も文學に忠なるの士は此二大雄篇をして机側に備へられよ

全壹冊紙數四百七十餘頁
寫眞版三色版五葉挿入
正價金八拾五錢
郵税金拾二錢
特製金壹圓
郵税金拾四錢

發行所　東京牛込早稲田　早稲田大學出版部
發賣所　東京日本橋區本町　博文館

新刊廣告

文學博士　坪井九馬三著（挿圖數葉入）

最新文學研究法

金壹冊總洋布製
紙數五百五拾餘頁
正價金壹圓六拾錢
郵税金拾四錢

著者坪井博士は史學を專攻せらるゝこと多年一日の如く現下斯道の大家として令名嘖々たるは普く人の知る處なり博士自ら本書に序して曰く予不敏と雖も史學研究法を講ずる爰に年あり科學的研究法を史學に應用し聊か得たるところあるを自信すと以て博士が本書に對する抱負如何を知るべし所説嶄新にして正確文章は極めて平易なる言文一致體を用ひられたれば一讀よく精髄を窺ふを得べし固より世間多く儔を見ざるのみならず將來亦容易に世に出で難き名著なり

發行所　東京牛込　早稲田大學出版部
發賣所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

青柳篤恒　中山東一郎共編

清國漫游案内

全壹册洋裝頗美本
清國風景寫眞版數葉入
正價金七拾五錢
郵稅金八錢

本書は日清兩國間及清國内地に於ける滊車滊船の發着時刻里程、賃銀等詳細にして鮮明なる諸表を掲げ清國各地の名所舊蹟より主なる旅館及其旅籠料等に至るまで周到精緻なる道中案内を載せ且附錄として日清兩國稅關手續より清國内地旅行用具等旅行者一般の心得をも叮嚀に説明したれば渡清者必携の好侶伴として盖し空前の指南針たらむ

發賣所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館
賣捌所　神田東京堂　神田有斐閣　本郷丁酉社　本郷文求堂其他

早稻田叢書

島村瀧太郎著述

新美辭學

全壹册
正價金壹圓卅錢
郵稅金拾六錢

●再●版●發●賣

本書は全然著者の新見に成れる者文章論より美學に歸結し、以て大方の批判を得んとす、且初學者の爲には、文學の入門たるべき準備と研究の過程とを有せり、文字に志あると否とを問はず國民の座右缺くべからざるの良書なり

序

沈思精研の餘に成れる抱月君が新美辭學一篇は我が國に於ては空前の好修辭論たり、彼方の類書に比するも周到なる修辭法に兼ぬるに創新なる美辭哲學を以てしたる、證例の東西雅俗にわたりて富贍なる、その例空し、斯學に志すの士は此の書にすがりて益する所いと多かるべし　逍遙

背●皮●上●製●五●百●餘●頁●

發賣所　東京牛込區　早稻田大學出版部
發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

御注文の節は本誌廣告に據る旨御附記を乞ふ

文學博士坪内雄藏　秋濤長田忠一序文
佛國文豪ユゴー作　尾崎紅葉譯

小說 鐘樓守

原名ノートル、ダーム、ド、パリー

これ十九世紀五大傑作の一大雄篇にして歐米の文壇を震動せしめたるものなり曩に紅葉山人病を獲て復た起つべからざるを知るや最後の傑作を世に殘さんと欲し曠世の靈腕を揮うて本篇の譯述に從ひ病魔の勢猖獗を極るも尚筆を絶たずして逝けり嗚呼この書啻に大ユゴーが一代の名作なるのみか實に紅葉山人最後の遺物なり世間文學に忠實なるの士請ふ爭ふてこの東西文豪の紀念に接せよ

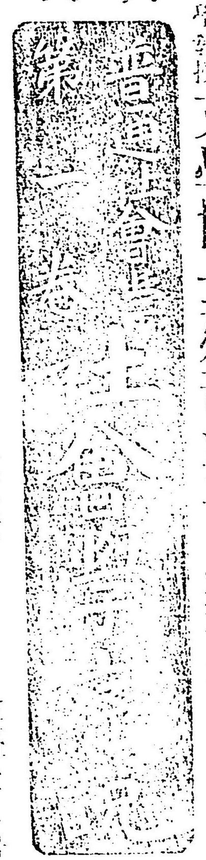
全二冊洋裝頗美本
紙數八百八十餘頁
三色版寫眞版七葉挿入
上卷金九十錢郵稅金八錢
下卷金一圓郵稅金十錢
特製合本二圓郵稅二十錢

發行所　東京牛込區早稲田
發賣所　東京市日本橋區本町三丁目　早稲田大學出版部　博文館

東京帝國大學文科大學教授　文學博士建部遯吾氏新著

新刊

社會の經營



全一冊
定價金五拾錢
小包送料拾五錢

頗近社會學の論究殊ともて隆盛なる世間然ならしむ社會を經營するは先づ社會を了解するを必要とすれはなり本書は東西古今の學說を參攝し斷學の眞義を闡いて明瞭簡切尚くも發者に示教し政治、經濟に法律に宗教に道徳に藝術に哲學に教育に家庭に其他各科の學術に與かる形式的議論に論及せずして實質的知識を將來文明の眞方途を指示し社會の根本的革新に意あるの君子に必要

發兌元　金港堂書籍株式會社

東京帝國大學文科大學教授 文學博士建部遯吾氏新著

新刊

普通社會學 第一卷 社會學序說

全一冊
定價壹圓五拾錢
小包送料拾五錢

社會の經營

輓近社會學の講究駸々として隆盛なる豈偶然ならむや社會を經營するは先づ社會を了解するを必要とすればなり本書は東西古今の學說を綜攬し斯學の眞義を闡いて明瞭適切苟くも教育に宗教に政治に經濟に法律に軍事に在來各科の學術が與ふる形式的議論に滿足せずして實質的知識を欲求するもの將來文明の眞方途を尋ね社會の根本的革新に意あるの君子は必ず一讀を吝むべからず

發兌元 東京市日本橋區本石町三丁目十七番地 電話(特)本局一六一七 本局三〇二番 金港堂書籍株式會社

毎月一回十日發行
（明治卅六年五月廿二日第三種郵便物認可）　中等教育第貳期第拾四號　（明治三十七年四月十日發行）

萬世不滅の好鑑

日露戰爭實記第九編臨時增刊

本誌前編

定期增刊
第七編
四月八日發行

日露戰爭實記

▲口繪＝計卅八頁（石版繪彩色刷大判一枚、新光澤紙刷四頁、寫眞版一百八葉、挿畫數十個）

軍神廣瀨中佐を知るものは本編を讀みて故人を偲ぶの料とせよ知らざる者は本編を繙き軍神の軍神たる所以を詳に**中佐の一生**は詳述して本編に在り**殊に**大佐が壯烈無比なる其**最後**までも手**血斑々たる地圖**其他中佐の絶筆照十五種及び**東郷中將**が特に戰地に在て揮灑し寄贈せられたる題字及中佐の書簡等何れも軍神の風韻を語るものに非るなし眞に稀世の珍**鮮**

海軍々令部長 海軍大將 伊東祐亨君題辭
艦隊司令長官 海軍中將 東郷平八郎君題辭

軍神廣瀨中佐

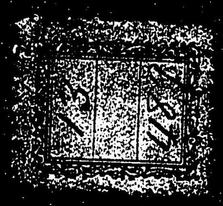
▲四月十八日發行●口繪光澤版＝六頁●寫眞版＝八頁●本文百卅八頁▲正價金十錢▲郵稅一錢五厘

本編口繪

軍神の寫眞計**十五種**●中佐の**肉片**及福井丸全乘組員●中佐の**祭壇**と**嚴父**及**妻**及**姪**及**姪**の小照（四枚）**西比利亞**旅行中の**中佐**と少佐時代の中佐及八代淺間艦長の**書簡**●少尉候補生より少佐の**血染**の**地圖**●朝日艦、報國丸及福井丸の**葉書**五枚福井丸全乘組員と中佐の**自筆**の人名●**令兄**勝比古君と謝辭及**謝狀**●中佐の**絶筆**と永眠の中佐●朝日艦上の中佐と**杉野**兵曹

寫眞畫報
毎月三回三の日＝發行
正價金十錢
郵稅一錢五厘
六冊五十七錢十二冊一圓十錢外に郵稅を要す

日露戰爭實記
毎月一回八日＝發行
正價二十錢
郵稅二錢半

東京本町三丁目
博文館發行

13
489